発達障害を伴う吃音の指導・支援(2)
- 予後を見据えた支援の在り方 -

企画者　宮本昌子（筑波大学　人間系）
司会　宮本昌子（筑波大学　人間系）
話題提供者　小林宏明（金沢大学　人間社会研究域学校教育系）
前新直志（国際医療福祉大学　保健医療学部）
宮本昌子（筑波大学　人間系）
指定討論者　酒井奈緒美（国立障害者リハビリテーションセンター研究所）

KEY WORDS: 吃音、クラタリング、発達障害、評価、指導、支援

【企画趣旨】

吃音のある者はその他の発達障害をも併せもつ割合が高いことが報告されている(Blood et al., 2001)。昨年度の自主シンポジウムでは、「発達障害を伴う吃音の指導・支援(1) - 医療・教育現場からの報告を踏まえた方向性の検討 - 」と題し、発達障害を伴う吃音の疫学研究のレビューと事例報告を行った。ことばの教室、医療施設の両方で、吃音が主訴で来所したが、背景に発達障害の特徴が顕著にみられる例や、いわゆる吃音症状とは異なる症状を表すクラタリング（早口言語症）の例が混在していることが明らかにされた。また、このような重複例においては、発達障害の症状の方が目立ち、解決が求められる問題として優先順位が高い場合、吃音や言語面への指導・支援に到達しない可能性があることも議論された。一方、児童にとっては、話し方が楽になる、あるいは上手になることで学校生活でのQOL が向上し、自己肯定感が高まる場合があることも事例紹介の中で話され、両面からのアプローチが重要であることが示唆された。

そこで今回は、吃音が主訴であるが、発達障害の診断や傾向、特徴を持つ場合の事例において、専門家が複数の諸特徴をどのようにアセスメントして問題を整理し、指導・支援に介入するのかについて紹介する。さらに、これらの事例を通し、いわゆる発達性吃音のみの場合とどのようにアセスメントや介入方法が異なるのか、将来を見据えた場合、どのような視点が重要になるのかについて検討したいと考える。

【話題提供者の趣旨】

①小林宏明（金沢大学　人間社会研究域学校教育系）

小学 4 年生男児。3 年生の時に、保護者から友達関係や学級活動でのトラブルが多いことの訴えがあり、吃音と発達の評価をするとともに、在籍学級の授業参観と担任との情報交換を行う。その結果、(a) 力の入った繰り返し、阻止、舌を出すなどの随伴運動が顕著で、吃音への意識や発話への苦手意識がある、(b) WISC-IV、LCSA は標準範囲であったが、LCSA 聞き取り文脈理解、慣用句・心的語彙の評価点が低いなどディスクレパンシーがある、(c) 学校での他児との関わりが少なく、教師の指示が入りにくい等の課題があることがわかった。そこで、指導・支援として、学級担任への情報提供と対応の提案、学校であったことや興味関心のあることを的確に伝える活動と発話症状の軽減・緩和を目指したスピーチセラピーを組み合わせた発話課題、吃音の基本的知識や対処法の学習を行う。

②前新直志（国際医療福祉大学　保健医療学部）

小学 1 年生男児。大きな音に過敏。当科初診時（5：3）の PVT-R で VA7：7 と SS17。軽い繰り返しとブロック、目を強く閉じる随伴症状を認めた。6 歳 2 カ月時に症状が悪化。ブロックの際に強い咬合状態（歯を食いしばる）での発話で語尾を異様に高くする話し方が出現。以降、現在（小 1 普通学級）までに吃音よりもプロソディーの特異性が顕著となる。吃音に気づき始めた頃から、吃音を含む自己発話に向き合う支援とその吃音の意識を反映させる吃音緩和法の併用を行った。吃音症状の改善的変化も重要な点だが、発達障害重複例では、メタ認知機能を高めることで、将来の社会性やより良い言語生活の基盤を見据えることが必要な場合もあると考える。

③宮本昌子（筑波大学　人間系）

クラタリングは日本では「早口症」と呼ばれる発話非流暢性障害であり、発達障害と重複しやすい。「繰り返し」の症状が吃音と共通していること、吃音と合併しやすいことから両者の区別が困難であり、吃音のある児童として指導を受けていることも多い。今回は、吃音が主訴で指導を開始していたが、小 4 から小 5 にかけてクラタリングへの介入を取り入れた事例について紹介し、クラタリングと吃音の鑑別の仕方等のアセスメント方法や指導・支援を始める手がかり、適切な時期について考えたい。

【指定討論者の趣旨】酒井奈緒美（国立障害者リハビリテーションセンター研究所）

成人吃音の臨床の中で、クラタリングと吃音の両方の特徴を示す者に遭遇する。彼らは学齢期以降に「何を言っているか分からない」などと指摘を受け、それらに対する自分なりの対処法を身につけていく中で吃音様の症状をも発症している場合がある。また発達障害と吃音を併せもつ者については、吃音についてのセルフモニタリングが弱い一方、吃音に対する他人の反応について自分なりの解釈・対応をしており、それらが彼らの吃音を悪化させている可能性もある。これらの成人期の問題の複雑性は、学齢時からクラタリングや発達障害の特性を踏まえて指導に当たることで未然に防げる可能性がある。クラタリングや発達障害を併せ持つ吃音のある児童の支援について、予後を見据えて考えていきたい。

（文献）

Blood, G.W., Ridenour Jr., VJ, Qualls. C.D., & Hammer, C.S.W. (2003) Co-occurring disorders in children who stutter. *Journal of Communication Disorders,* 36, 427-448.

(MIYAMOTO Shoko, KOBAYASHI Hiroaki, MAEARA Naoshi, SAKAI Naomi)